

越智武臣著

『近代英国の発見——戦後史学の彼方——』

井野瀬久美恵

英国の経済史家E・J・ホブスボウムは、『帝国の時代 一八七五—一九一四』（一九八七年）の冒頭で、次のように述べている。

「我々すべてには、歴史 history と記憶 memory の間にトワイライト・ゾーンがある。比較的感情を押し殺す綿密な研究に開かれた一般的記録としての過去と、その人の人生の一部、あるいは背景となって記憶されている過去との間に。……このゾーンの長さは人さまざまであり、その特徴たる曖昧さ、不鮮明さの程度もまた、人さまざまである。……そしてそれ〔トワイライト・ゾーン〕は、個人のみならず、社会にもあてはまることである」
(E. J. Hobsbaum, *The Age of Empire 1875-1914*, 1987 (1989), p. 3)

本書は、かつて光であった戦後史学が影となり、闇に溶け込むうとする黄昏ときに立ちあつた著者が、我が国における英国史研究のトワイライト・ゾーンを、自らの英国史への関わり合いを通じて語った回顧の書である。著者は、それを、現れては追いかけにくる影法師と呼ぶ。

一

今をさること四半世紀前、著者は、『近代英国の起源』（ミネルヴァ書房、一九六六年）を著わし、戦後史学に代わる新しい近代英国像を世に問うた。自らが終生の師と仰ぐR・H・トニーの著作『一六世紀の農業問題』『宗教と資本主義の興隆』等々を詳細に再検討し、ウェーバー描く近代資本主義精神Ⅱ禁欲倫理の典型的体現者、リチャード・バクスター像の修正を通して、著者は、戦後史学の雄、大塚史学が「近代資本家の系譜」と呼んだヨーマンリの上昇過程、そこから導き出した「初期産業資本」説を鋭く批判した。そして、ヨーマンリに代わる近代英国の担い手を地主Ⅱジェントリに認め、社会経済史学一辺倒の当時であつて、政治、社会、文化といったさまざまな角度からこれを分析、考察することを通じ、その後の英国史研究の流れを大きく変えた。著者、ならびに同書の歴史学界における位置づけについては、ここで改めて繰り返すまでもないだろう。

本書はその後に著され、折りに触れて発表された一六、七世紀に関する九本の論文を、全三章各三節に編んだものである。それゆえに論集的な色あいが濃く、ひとつのテーマが流れを追って論じられているわけではない。しかしながら、いやそれゆえに、各論文は、自らの記憶と歴史の間に横たわるトワイライト・ゾーン、そこに溶け込んだ戦後史学の影から抜け出ようと試行錯誤を繰り返した、著者の近代英国発見の軌跡のひとつひとつと見ることができよう。

このような本書の性格上、各章を詳細に評するという大任は、

評者の能力をはるかに越えることである。奇しくも著者が初めての留学先、イングランド北部の港町ヘルにたたずみ、近代英国の何かを実感していた年月にこの世に生を受けた評者は、著者がいみじくも言われた「急に世界が開け、大空向けて飛び立っていくもはや戦後のかげりすらない若い人々」に属す。その評者にとつて、著者の歴史と記憶の狭間を占めるトワイライト・ゾーン、本書第一章第一、二節で詳しく述べられる戦後史学は、初めから文字通りの「歴史」であった。

「史学ほど時代の動きを尖鋭に反映するものはない」とは、本書に吐露された著者の言葉であるが、まこと歴史家とは、歴史研究と関わる地点の国際情勢、それも研究の対象たる英国以上に、研究の現場たる我が国の国際社会における立場によっていかに左右されるものであろうか。かたや、戦争、敗戦の事実、そしてその後に通じた戦後日本の貧しさと混乱という過酷な現実から再建の範を英国史に求め、今なお戦後史学を記憶としてとどめる先達たち。かたや、一九六〇年代、日本の高度経済成長期に物心を覚え、物質的豊かさのなかで歴史研究を出発させた世代。評者が英国史研究に手を染めはじめたとき、かつての理想郷、英国は、文字通り「陽の没する処の国」でしかなかった。かつて、著者にとって自明であった「英国史を学ぶこと」が、「なぜ今英国史なのか」を問われる時代であった。英国の変化もさることながら、それ以上に変わったのは、我が日本であった。

この認識の相違は、そのまま、各々の歴史観に投影される。それは、ちょうど、著者が本書第二章第一、二節で論じた世代論による英国ルネサンス分析に酷似している。しかも、一六世紀と二

〇世紀という違いこそあれど、著者はエリザベス女王やその重臣ウィリアム・セシル、レスター伯らが属した三〇年世代。そして評者は、セシルの息子ロバートやレスター伯の継子エセックス伯サー・ウォルター・ローリーらの六〇年世代。前者は中庸たることを尊ぶ宗教改革の落とし子。後者は満たされぬ野心と強欲にさいなまれ、憂鬱のまま世紀末を彩ったルネサンスの申し子。二〇世紀は、たえず自分の姿に似せて一六世紀を書きかえつつある」とは著者が引いたトニーの後継者フィッシュャーの弁だが、それにしては実に奇妙な、偶然的相似形――。

つまるところ、戦後史学の評価は、まさしく、本書を読む者の英国への、英国史への想いに委ねられるべきものではなからうか。評者の力不足は平にご容赦願いたい。しかしながら、歴史という時空を飛びはじめたばかりの、親鳥に報いるにはあまりに幼いひな鳥にできることといえ、自分の関心に引きつけて、多少ながらも、若干の問題を洗い出すくらいのものである。

二

いささか前置きが長くなったが、まずは、章を追いつつ、多少の私見をまじえながら、本書の内容を紹介することにしたい。

第一章〈戦後史学と英国史研究〉では、英国史が閉ざされた日本を映す鏡として期待され、戦後史学が光を放っていた時代に、本書の副題に曰く「戦後史学の彼方」を旨とした著者の試行錯誤の過程が、三論文にて綴られる。前二論文は、敗戦という非情な現実に原点をもつ戦後史学が依然として著者の記憶に鮮やかであった一九七〇年前後の作。比較的執筆の新しい第三節とても、そ

の着想はこの時代にある。

戦後史学は、すべての歴史事象を、光と闇、善と悪という短絡的な二元論で斬った。産業資本対商業資本、都市対農村、ジェントリ対ヨーマンリ等々。しかしながら著者はいう。近代化とは資本主義化とイコールではないし、市民社会化とも同義語ではない。歴史とは必然の結果でもなければ、自生的な発展の結果でもない。曲折に曲折を重ねた結果でしかないのだ。歴史家は、その曲折の機微を読みこまなければならぬのだ。と。第一節「近代化」問題の省察に記されたこの主張こそ、今なお変わらぬ著者の歴史を見る基本的な姿勢である。

かくして、著者は、世界で初めて市民革命と産業革命を達成して光が闇を越えた国、ホイッグの進歩史観に染めぬかれた輝ける英国の歴史に、光と闇とが交錯する不透明な屈折を見いだす。闇がなければ光は見えてこない——その過程で、大塚史学のいうヨーマンリの両極分解による資本主義の直線的な発展、経済偏重のマルクス流発展段階論は、政治、社会、文化など多面的に人間の欲求を捉える著者によって、次第に書きかえられていく。

評
書

続く第二節「近代英国史の発見」、第三節「ヘリチャード・バクスターとマーガレット・チャールトン」は、文字通り、著者の近代英国発見の原点を描いたものである。第三章第三節でも語られるR・H・トニーの書『宗教と資本主義の興隆』との出会い。この標題に覚えたショック。「なぜ宗教と資本主義を religion という接続詞で結ぶことができるのか」——。この謎を解きあかす過程、著者曰く「バクスターをウェーバーの旧屋からつれだし、生ま身の血を通わせ」るさま。すでにそれらは前書『近代英国の起源』

第三章第二節に詳しいが、著者が長年暖めてきた本書のバクスター伝には、歴史研究の方法として叙述を重んじ、歴史のひだを生きた人間の息づかいを読みとろうとする著者の感性がいかに発揮されている。

バクスター像をめぐる誤解が氷解した瞬間こそ、氏の「近代英国」像誕生の間際であった。それはまた、ウェーバー流資本主義精神の体現者として、あるいは後の産業資本家の先祖として、「ヨーマンリ万歳！」を叫ぶ日本の英国史学界との訣別の瞬間ともなった。以後も、戦後史学は影法師となつて著者の後を追う。追われつつも、著者のジェントリ、ジェントルマンを軸とする近代英国像は揺がない。その成果こそ、前書『近代英国の起源』であった。

それとても二〇数年前のこと。その後、氏の著作に触発され、ジェントリ、ジェントルマンという政治、社会、文化的存在を軸として、新しい近代英国像が続々と世に出た。かくいう評者も、この不可思議なジェントルマンなる存在に関わることから、歴史研究の第一歩を踏み出した。評者も加わり、著者の京都大学退官を記念して上梓された『ジェントルマン——イギリス近代とその周辺』（ミネルヴァ書房、一九八七年）は、(多少の自負を込めて)その大きな成果といえよう。現在では、一八七〇年代までの英国が、政治的、社会的、文化的にジェントルマンの覇権下にあったことが半ば定説と化している。もっとも、著者、並びに著者とともに「英国史という道同行」した者たちを、京都学派なり、その他諸々の固有名称を冠して「〇〇学派」と称する向きもなきにしもあらずである。しかしながら、こうしたレッテルこそ、著者が

本書の端々で避けたいものとして記した「無知の告白」「寂しき史家の貧しき発想」でしかなかろう。いずれにしても、近代英国の担い手としてヨーロッパ人万歳を繰り返した戦後史学は、ジェントルマン研究の成果によって、文字通り歴史化されたと見ていいだろう。また、近年のジェントルマン研究が、ジェントルマンそのものよりも、政治、社会、文化的にジェントルマンへのゲモニーにとり込まれた人びと、いわゆる疑似ジェントルマンへと関心の矛先を変えつつあることも付記しておきたい。

きわめて自伝的色彩の濃い第一章に続く第二章「ルネサンス研究の側灯」では、近代英国の時代的雰囲気とその由因を探ろうとする著者独特のアプローチが興味を魅く。

第一節「エリザベス朝再考」は、戦後史学がきらめく光で包んだエリザベス朝が前代未聞の大不況期であったことを見事に証明した。この結論以後、近代英国の経済史的な分析は、その重心を、英国の先進性から発展を阻んだ要因分析へと方向を変えている。

比較的新しい論考、第二節「シェイクスピアの時代背景」は、戦後史学に欠けていた政治、文化、社会的側面から、エリザベス朝的なものを世代現象として捉えた好論である。本書評の先でも述べたが、一五三〇年世代と一五六〇年世代の時代に対する認識の相違——宗教改革の申し子であるがゆえに中崩を何よりもよしとした前者と、長子相続制ゆえに生家を追われた後者、ジェントルの次・三男に蔓延する野心と強欲、それが満たされぬ閉塞の世紀末。老い一つも新世代から活動の場を奪ってきた旧世代たちは、再婚、再々婚を繰り返すことで、新しい世代に家庭崩壊感をも植えつけた。「家庭なき家族の世紀」——それこそ、シェイクスピア

劇を生んだ土壌であったと著者は分析する。もっとも、科学的歴史を標榜する史家たちのなかには、この世代論が資料的に見てどこまで有効かと、首をかしげる向きもあろう。しかし、ここに示された感性なくして、歴史のひだを読むことなどできないのではないだろうか。

そして、六〇年世代の憂鬱に包まれた一六世紀末を経て一七世紀に入ると、時代の空気は一変する。ルネサンスの時代は終わりを告げ、時代は危機に向かってひた走る。「封建制から資本主義体制への全面的移行の最終段階」の産物としてこの危機を見るホブズボウムと、それを奢侈のために重税を課せようとするルネサンス宮廷とそれに反発する地方、いわゆる国家と社会の対立とみなすトレヴァ・ローパーとの論争で余りにも有名な「一七世紀の危機」、「革命の世紀」の幕あけである。著者は、第三節「一七世紀という時代」において、この危機がヨーロッパに限らず、全世界的な現象であったことを示し、危機論争の論客たちに次のような根本的疑問をつきつける。「なぜ一七世紀なのか」と。著者によれば、その究極因は、ルネサンスの時代を特徴づけた経済的なスペインの覇権と文化的なカトリックの崩壊にあるという。つまるところ、この危機の本質は、信仰と理性との共存が可能であったルネサンスの「知性と感性の統一」解体の結果にあり、信仰と理性のバランスが、一七世紀前半は信仰に、その後半は理性に片寄せた結果、時代の空気が大きく揺れたのだと。科学的歴史、数量的歴史が跋扈する今だからこそ、著者のこの感性とその叙述から我々が学ぶものは大きいだろう。

第三章「国民史研究の内と外」は、国民史に終始した戦後史学

以降の近代英国史研究が、海事史と地方史という新しい地平に展開方向を求めたという指摘である。

第一節〈大航海時代の英国〉は、近年の著者の偉業のひとつである『大航海時代叢書』（第Ⅱ期 第一七、岩波書店）に収められた解説を下敷きにしたものであり、ヨーロッパという胎盤から切りはなされ、島国となった英国が、海とともに近代を切り開いた陣痛の時代が余すところなく描かれている。その原動力となったのも、第二章第二節で論じられた六〇年世代の若きジェントルマンの次・三男たちであった。宮廷や教会、法曹界など既存の職場から締め出され、海の彼方に新天地を求めた彼らの多くが、大西洋に向かってロンドンとは違う顔をもつイングランド西部地方出身者。彼らを大西洋の彼方へと向かわせたのは、ロンドンとは異なる西部地方人気質と行動原理であったと思われる。彼らの間に張りめぐらされ、彼らの行動を縛った血縁的、あるいは知的ネットワークは、中央とは異なる地方人魂揺籃の場でもあった。そんな示唆は、地方史のあり方を論じた第二節〈地方史研究の現在と過去〉に連なり、ロンドン偏重であった英国史への反省を促す。

その第二節は、かつて著者が、近代英国の胎動とともにその繁栄の時を終えたイングランド北部ヘルの港町に留学した歳月の間は、また、その後改めて、地方史研究の独立した学部を初めて創設して以後地方史研究のセンターとなったレスター大学を訪れたときに、肌で感じとった英国地方史研究論である。著者はまず、こう問いかける。——そもそも「地方」とは何か、それに対峙する「中央」とはどこなのか、その各々にとって歴史とは何か。

ここでも、著者の関心は、ジェントルマンにある。実際、英国における地方史研究は、当初から、ジェントルマンの存在を意識しながら存在した。すなわち、第一期（一六世紀前半から一九世紀中葉）は教養人ジェントルマンのアマチュアリズムに貫かれた地方史の時代、第二期（一九世紀中葉から第一次世界大戦終結）は相次ぐ地方大学の創設と呼応する形で、地方史が独自の体系を整えつつ、地方ジェントルマンの利害に貢献した時期、そして第三期（大英帝国凋落の戦間期）はジェントルマンからの地方史の解放期、というように……。著者は、第三期に主力を演じたレスター派地方史学の欠陥を指摘しながら、こう静かに繰り返す。「地方史は国民史との緊張においてはじめて地方史たりえる」——突に説得的だ。むろん、その際にも、国民とは誰の利害代表かといった、たえず用語に正確さを期そうとする著者の姿勢が、見事なまでに貫かれている。

さて、この地方史研究の最後の局面は、ジェントルマンであることの危機が叫ばれた時代であったとともに、労働者の高等教育制度の確立を旨とする運動が高まった時代とも重なる。イギリスが今なお誇る成人教育のセンター、「労働者教育協会」で地方史が渴望されたとき、それこそ著者にとっての生涯の師、R・H・トニーその人の登場のときであった。彼の軌跡をさまざまに機会をとらえて綴った第三節〈歴史家リチャード・ヘンリー・トニー〉は、歴史家としての著者の生きざま、英国史への想いに満ちた珠玉の作品である。『一六世紀の農業問題』に描かれたヨーマンリーの上昇ならぬその没落の軌跡に寄せるトニーの深い同情。生死をさまよった戦争体験。それが彼の何かを変えた。その後著

された「ジェントリの勃興」には、ヨーロッパを追い出して近代英国の担い手となったジェントリに対する憤りを超越した、トニーの穏やかさが漂う。ジェントルマンの家系に生まれながら、生涯ジェントルマンであることを拒否した歴史家トニー。著者の近代英国発見の旅は、トニーにはじまり、そしてトニーでひとつの幕を下ろしたのである。

三

本書の構成、及び内容は以上のようなようであるが、通読した後の第一印象は、流麗な文体に、そして時折挿入された著者自らがかの地に於て写した写真一枚一枚に込められた、著者の英国に対する変わらぬ熱き想いであった。本書に収められた論文のいくつかは、戦後史学が依然著者にとって鮮やかな記憶であった時代のものである。にもかかわらず、それらは今なお新鮮な輝きを失ってはいない。思い入れなくして歴史を描くことはできない。喧しかった戦後史学の叫びも影も、著者の英国への想いの前に今やたちすくむしかない。

むろん今なお、戦後史学は、著者にとっての影法師、日本の英国史研究にとってのトワイライト・ゾーンではあろう。しかしながら、(繰り返しになるが)戦後史学を、その彼方に生まれた英国歴史学研究成果、現状とどう関連づけるか、もっといえば、戦後史学を記憶からいかに摘出して歴史化するかという問題は、我々歴史研究に携わる者ひとりひとりに託された課題なのである。

著者も述べているように、かつて戦後史学に、いやそもそも英国の歴史に、まばゆいばかりのきらめきを与えていたのは、敗戦

という事実のうちめされ、立て直しのために蘆をも掴みかかった戦後日本の現実であった。そして、戦後史学をその玉座から追いやったのも、同じく時代であった。歴史学、そして歴史家は、いつの世にも時代的制約を受けざるを得ない存在である。トニーしかり。著者しかり。そして、私たち若い世代の研究者も、意識するとしなやかかわらず、今という時代に縛られている。時代を超越した絶対的な歴史など、あるはずもない。となれば、刻々と表情を変える世界情勢、大きく様変わりしたヨーロッパ地図、それに伴って多元化する現代の価値観のなかで、今なお、そしてこれからも、このトワイライト・ゾーンは、修正と再検討にさらされていくことになろう。

最後に、戦後史学のはるか彼方にいる評者の関心をひいた二、三の問題点を提起させていただくことにしたい。

まずは、著者が前書に引き続き、本書に用いた「近代」というターム自身の、戦後史学の彼方における有効性に関してである。なるほど、戦後史学が光であった時代、敗戦後の日本をいかに「近代化」するかが問題の焦点であった時代なればこそ、近代化の典型とされた「近代」英国というタームは意味をなした。このあたりの感覚は著者自身の意識するところでもある。「近代」は、何よりもまず、敗戦後の日本が直面した過酷な現実のなかで意識されたもの——著者の言葉を借りれば「自分を翻弄し責めさいなむ『あるもの』——として存在した。著者にとっての「近代」(正確に伝統的な時代区分に従えば、著者が対象とする一六、七世紀は、近代前期、「近世」に当るが)は、単なる時代区分以上のものであった。言ってみれば、「近代英国の発見」の過程そのものが、

著者のみならず、英国史研究の先覚にとつて、それぞれの人生の一部を成す記憶と、相対化、一般化された歴史とが交錯する、文字通りのトワイライト・ゾーンだったのだ。

しかし、「戦後史学」のはるか彼方にきてしまった現在、「近代」なる言葉は、便宜上の時代区分以上にどんな意味をもち得るものであろうか。問題は、「近代」が、英国の、そしてそこに生きた人びとの生活や意識が変わったことの指標としてどこまで有効であるかにある。

近年、この観点から、歴史的变化の切れ目を、伝統的な時代区分ではなく、「工業化」というタームで表現しようとする傾向が強い。例えば、一九六四年に結成された「人口史、社会構造史に関するケンブリッジ・グループ」は、このタームによって、変化のみならず、変わらぬものをも分析対象にすえた。その結果、中世と近世の区分は必要ないとまでいう同グループの中心的メンバー、ピーター・ラスレットは、工業化以前と以後（伝統的時代区分でいえば近世と近代）の区切りもまた、安易に想定される産業革命期にはなく、工業化が人びとの生活、メンタリティを決定的に変えた一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての時期にあると考えている。もちろん、「イギリス革命」不在論を唱えるケンブリッジ・グループが試みた歴史の数量化は、著者が本書第二章の冒頭にて指摘したような陥穽に陥る危険性を常に孕んでいるし、同グループが数字にならない非物質的な力の存在をどう読み込んでいくかにも疑問は残ろう。また、ここで近代という用語の是非を論ずるつもりも毛頭ない。ただ、著者のような強い近代英国への思い入れが希薄化しつつある戦後史学の彼方、昨今の英国史研究

において、「工業化」が近世、近代という言葉以上に説得的な時代区分のメルクマールとして定着しはじめたことは無視できない。そのなかで、「工業化までにゆきつく経済変化の根を、少なくとも一六世紀におけるエンクロージャ運動やかかりの土地所有権の移動にまでさかのぼるものとみなし」、そこに社会経済史的側面のみならず、社会の価値観の変化を読み込んだトニーに対して「長期の展望に立ち……工業化は喪失・損失であったという考え方に、より体系的な形を与えた」（ゲオルク・G・イッガーズ、中村幹雄他訳『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房、一九八六年、二二六頁）との位置づけがなされていることも看過できない事実である。

もうひとつは、著者が感慨を込めて呼ぶ「近代英国」を考える際の枠組の問題である。近代英国が歩んだ道程は、国内におけるジェントルマン覇権確立の歴史であるとともに、大英帝国に植民地支配の歴史でもあった。前者に関しては、前書同様、本書においても著者の分析は極めて明瞭である。また、後者についても、国民史を越えた英国史展開の場として、地方とともに海を挙げ、海に向かって近代を切り開こうとした島国の試行錯誤が見事に描き出されている。しかしながら、この二つが著者のなかでどう関連しあっているのか——この点には多少未消化の部分が残る。

一六、七世紀、大西洋の彼方に新しい英国を求めたのは、著者の指摘通り、その大半が長子相続制ゆえに自活を余儀なくされたジェントルマンの次・三男たちであった。その限りに対して、植民地は、本国では見込みの少ない、彼らにふさわしい職業と生計の手段を提供する場として、本国と社会的にはっきりとリンクし

ていた。この連関の上に、やがて一八世紀以後、庶民生活とも絡みながら展開していく英国の社会的、文化的な拡大、あるいは変質の歴史があったといえる。しかしながら、著者は、この時期の英国の海外膨張については、その推進力、すなわち、まず過剰な毛織物製品のはけ口という経済的側面、次いでスペイン帝国打倒という（国際）政治的側面を強く打ち出してはいるものの、それらと並行する社会的側面や連関についてはさほど言及がないように思われる。もっとも、帝國的膨張の理論的支柱は、実際そんなところであったのだろうし、海に出ていった直接の動機は経済的なものであっただろう。しかし、海への英国の膨張は、一六世紀にはじまり、一七世紀後半に確立する国内のジェントルマン支配体制と無関係であったわけではない。ではこの二つはどんな形で関わっていたのか。この時期の海外膨張はいったい誰のためのものだったのか——。例えば、ローリーの第二回ヴァージニア植民に多数家族で参加した者たちにとって、海を渡すことは何を意味していたのだろうか。いや、その前に、そもそも現実にアメリカへの移民を決意したのはどんな人びとだったのか。彼らは、著者のいう地方に広がる「ジェントリ家族という磁場」で、ジェント

リと現実にどんな関係にあったのか。帝国Ⅱ植民地は、ジェントリ家族の栄枯盛衰にどんな関わりをもったのか——地方に家父長的支配のネットワークを張りめぐらしたジェントリ家族が、大西洋をまたにかけて築いたもうひとつの家族ネットワーク、いうなれば近代英国の帝國的拡大の社会的側面についても、著者からながしかのご教示を得たいものである。

四

以上、思いつくままを述べてきた。しかしそれらも、本書の問題点というよりも、本書をステップにしてさらに歴史研究の時空を広げたいと願う評者の自戒の弁なのかもしれない。読み間違いの責任は、すべて評者の力不足にある。

いずれにしても、評者の無味乾燥な言葉の羅列よりも、漢語のリズムにのって奏でられる著者の美しい調べに、自分史を語る熱っぽい叙述に耳を傾けていただきたい。私事で恐縮だが、かつて評者が京都大学文学部の講義室でうっとり聞き惚れたあの越智節は、今だ本書に健在である。

(A5判 三六四頁 一九九〇年七月 ミネルヴァ書房 四八〇〇円)

(甲南大学助教授